

## MM116-075 『絵本千賀浦』 —翻刻資料—

寛延三(1750)初春 安永七(1778)戊戌歳改正／大坂書林 心齋橋筋轉勞町南江入本屋又兵衛板。作者 田中羅山、畫工 寺井重房、彫刻 藤村忠兵衛。

## 絵本千賀浦序

蓬が窓乃本に古へ今乃文をくりひろげ、見ぬ世の人を友として獨樂乃境にだに散かふ机上の塵を拂ひ侍れば、誰人乃書捨しやらん反古一卷侍る。これを見れば耳近き世乃諺を物して教草と成べき数々になん侍れば、我にひとしきおろかなる人の為にもと思ひ寄心の花を寺井氏乃手にひらかせて三巻とハ成けらし。年乃はつ春 探美亭 羅山

〔馬玩具に跨遊ぶ童子圖繪：上一才〕

01 堪忍が百貫するとは忍ハ一字千金の兵法なりといふより出たりいづれ万事に堪忍さへすれば一生身をあやまつ事ハなきもの也。〔上一ウ 78 / 79〕

02 鑰の穴から天をのぞくとハ世界乃廣大なる事をしらず万事我釜の前より外をしらぬ小智小見なる人に譬たる詞なり。〔上二ウ・80 / 81〕

03 猿猴が月とハたとへば矢瀬大原乃黒木賣賤の女が殿上人乃やんごとなき御ありさまに思ひかけて戀なやむと軍術武藝ハ怪我のもとひと人に異見する臆病な浪人が高知行をのぞむとハ身の程をしらず愚痴なる事月をとらんとする猿乃ごとし。〔上三・82 / 83〕

04 井の中乃蛙大海を知らずとハおのれが小智をもつて、他の大智をはからんとするたとへにいへり。七書の素讀したわろが世界の軍者ハ我計と心得、孔明が八陣も古風で役に立ませぬ、正成が千早の備もあれでハござらぬといふたぐひなり。〔上四ウ・84 / 85〕

05 落花狼藉とハ女中の花見幕打はへておもしろふ樂しみて居る所へ近付乃むくつけ男乃來りて、提重喰あらし、小筒乃底をたゞきて嘔美といふて立帰るハ誠に落花狼藉なるもの也。〔上五ウ・86 / 87〕

06 山の芋が鰻になるとハ万物變化乃理をいふ也。雀海中に入て蛤となる。皮草履乃古きが薙刀と變じ、むかし作りの頑親父が毛虫に化するも、梶原が蚰蜒になれるたぐひなるべし。〔上六ウ・88 / 89〕

07 世ハもと忍びとハ新古今にながらへば、又此ごろや忍バれん、うしと見し世ぞ今はこひしき。むかし乃全盛の花ちりて何かにおびしきに付て、いにしへ乃事を思ひかぞへて戀しくおもふ事にいへり。〔上七ウ・90 / 91〕

08 和光同塵とは我智恵乃光をかくして外へあらハさぬを和光といふ也。世俗の塵にまじはりて我を我とせず、少しも我意なふして世をなんともなふ暮すを同塵といふなり。〔上八ウ・92 / 93〕

09 鹿を遂獵師ハ山を見ずとは目前乃利欲にまよひて後々は小利大損の蹄にかゝる事をしらざる類にいふ詞也。つゝしむべし。〔上九ウ・94 / 95〕

10 狂人走れば不狂人も走るといふは今を盛と悪性ぐるひする人にさま／＼異見すれども聞いれぬをいきどほり色を違へてあらそひのゝするハ不狂人も走るとひとしかるべし。〔上十ウ・96 / 97〕



11 瓢箪で鯨おさゆるといふハ氣のぐれつく人乃心と虚をいふ人の詞とは慥ならず。捉まへ所なき事、瓢箪でおさゆる鯨乃とし。〔上十一ウ・98〕

12 飛で火に入夏の虫といふハ道ならぬ不義の財宝をむさぶり、我身乃亡ぶる事をしらざるものたとへなり。古今集に夏のむし何かいひけん心から我もおもひにもへぬべらなり。〔上十二オ・99〕

13 天知る地しるといふハ後漢の楊震といふ人、王密がをくりし黄金を受ずして、かくいひしより出たり。親父はしられぬと思ひて盗づかひにする。飛物達、楊震が曰知乃事をよく／＼わきまへつゝしむべし。〔中一・100／101〕

14 持仏堂と姑は置所がないといふハ人の家乃内にすぐれて尊きものなればかくいふなり。しかるをあしく心得てさせる役にも立ぬものなれど、家内になくて叶ハぬものなれば、置所なくて迷惑するところへるは大きにあやまりなるべし。〔中二ウ・102／103〕

15 重荷に小付といふハ後撰乃哥に、年の数つまんとすなる重荷にいと小付のこりもそへなん。貧な人に年子の出来ると白髪を染て傾城ぐるひをせらるゝ親父を持た息子とハせんかたなき重荷に小付ものなるべし。〔中三ウ・104／105〕

16 塵がつもつて山と成とハわづかなる物にても次第につもれば大きに成といふたとへ也。千万両乃金も錢壺文のつもりてなれる物也。壺文も小判の端くれ、大切にすべき事なり。〔中四ウ・106・107〕

17 一をもつて万をしるといふハ物の惣体を見ざれども、其端を見て其奥をしる事にいへり。立きつた後家の浅黄裏が紅絹裏に變ずるを見て、和尚様乃五重相傳の奥儀がしれましたと、かしこき人のいハれしもさる事ぞかし。〔中五ウ・108／109〕

18 急がばまハれといふを急げバまハるといふハあやまり也。此心ハ古哥に、武士乃矢ばせの船ハはやくともいそがばまハれ勢多の長はし。右の哥より出たり。勢多からげといふ事も此所をまはる時よりいひそめ侍りけるとかや。〔中六ウ・110／111〕

19 蓼くふむしも好／＼とハ浄るりかたりの子に浄るりをいやがつて、諷にうき身をやつすもあり。親代々の法花宗に念仏おもしろがる人もあり。甘ものを好人あり。苦ものをすく人あり。いづれも天性乃自然なれば、兎角いひがたし。〔中七ウ・112／113〕

20 念力岩を通すといふ事はもろこしの李將軍が虎に似たる岩を射たる事より出たり。一切の事に念慮をかけて、おこたりなければ其事成就するといふたとへ也。蚤の息が天へのぼるといふ事おもひ念すべし。〔中八ウ・114／115〕

21 麻につく蓬といふハよき人に立まじわれバ自然と身も心も正しく成事にいへり。富貴なる人に使はるゝ在所育の長太郎も見るを見まねにおのづから風流に成事後々ハ歴々の手代になる類ひをいふなるべし。〔中九ウ・116／117〕

22 論語よミの論語よまずといふハ論語をよみて聖人乃道をしれども、其身に行ふ事をしらざる人をいふ也。論語の素よミだにせぬ人の論語よミに異見せし時、彼人かくぞよミける。論語よミの論語しらずハうらやまし。論語よまず乃論語しらずハ。〔中十ウ・118／119〕

23 犬の年の寄たといふ事ハ年寄ても何乃才能なく、無益の人をいふなり。西園寺内大臣老僧を見てあな尊乃氣色やとて札をなし給ふを資朝卿見て後日にむく狗のあさましく老さらばひたるを引せて此氣色とふとく見へて候とて内府へ参らせられける。此事より出たる詞也。〔中十一・120／121〕

24 馬の耳に風とは聞入ぬ人に異見するハ聾をつれて時鳥を聞に行がごとき譬なり。〔中十二ウ・122〕

25 鯛の頭も信心からとは一切乃物ハもてなしにて尊く成たとへなり。薬賣の口上と丸薬を

金銀乃箔にてまろばかすハ人乃信仰をまねく方便なり。〔下一・123〕

26 陰徳あれば陽報ありといふハ人乃しらざる育をほどこせば自然と陽なる果報を得る事あるをいふ也。陰徳は陽徳にまさる事十倍なり。〔下一ウ・124 / 125〕

27 鳥ない里の蝙蝠といふハひら仮名乃妙薬本一冊を持って片山家にて醫者と出かくれバ肉付乃薬師様ともてなさるゝ類ひをいふ也。古哥に人もなく鳥もなからん嶋にては此かふもりも君をたづねん。〔下二ウ・126 / 127〕

28 お髭の塵を取とハ丁謂といふもの萊公が髭をぬぐひしより出たる詞也。旦那／＼とそやしたて常に指の股をひろげ追縦輕薄にて身を過る臺頭末社乃たぐひをいふなり。〔下三ウ・128 / 129〕

29 蟻螂が斧とは齊の莊公乃事より出たり。女子供にても直下に見てあなどるまじき。たとへなれども今ハ我力に及ばぬ事を願ふものをあざける事にもいひならハせり。〔下四ウ・130 / 131〕

30 金言耳に逆ふとハ年寄て万事にこなれたる人乃いふ事は血氣さかんの若人乃耳に逆ふものなれども至極ハ我身の為に成事多きもの也。良薬は口に苦けれども病に利めあるがごとし。〔下五ウ・132 / 133〕

31 錦を着て故郷へ帰るといふハ傾城乃買置から身体を棒にふりし放子が糠味噌汁乃味をおぼへむかしハ抛入て詠し花乃壺文賣より段々出世してふたゝび以前の富貴に立帰るたぐひをいふなり。〔下六ウ・134 / 135〕

32 鷹ハ飢ても穂ハつまずとハおのれが餌食の小鳥より外米の穂も喰事なし。義を守る誠乃武士ハ饑渴に及べども不義乃知行俸禄ハ受ずといふこれらのたとへなり。〔下七ウ・136 / 137〕

33 云ぬはいふにまさるといふハ風雅集にいふよりもいわで思ふハマさるとて問ぬハとふにおとりやハせじ。物事に出すぎたる者が夜前淀乃わたりにてほとゝぎすが一ト聲音づれましたが年寄こいと鳴ましたと子細らしくいふたぐひなり。〔下八ウ・138 / 139〕

34 鳶が鷹を産だといふはいやしき人が貴きを産出せしたぐひまれなる事にいへる譬なり。日雇乃六兵衛が娘が舞子から出世して若殿を産ましたといふたぐひなるべし。〔下九ウ・140 / 141〕

35 毛を吹て疵をもとむとハ古哥に直す木にまがれる枝もあるものを毛を吹て疵をいふがいりなき人の身乃上の非を正さんとしてかへつて我十分乃非をあらハすたぐひをいふなり。〔下十・142 / 143〕

作者 田中羅山  
畫工 寺井重房  
彫刻 藤村忠兵衛

寛延三初春

安永七戊戌歳改正

大坂書林 心齋橋筋轉勞町南江入 本屋又兵衛板〔下十一ウ・144〕

《完了》